

むかし。

よごべえという漁師りようしがいました。よごべえは、最上川もがみがわのあゆをとってそれを売って暮くらしていました。

ある日のこと、よごべえは、あゆを入れた箱はこをかついで町へ売りに行きました。

「あゆゝ、あゆゝ」といつて売り歩きました。

ぜんぶ売れた帰り道、急に風がふき始めました。

「強い風がふくなあ」と思っているうちに、つむじ風になって、あたりの木の葉がみなくると風にのって天に舞まい上がって行きました。

「こりやこまったなあ」と思っているうちに、なんでもかんでも天に舞い上がっていきます。よごべえは、

「おれまで天に舞い上がってはこまる。くわの木にでも登ってよう」と思つて、あゆ箱をほうり出して、道ばたのくわの木にしがみついて登って行きました。

ところが、みるみるうちに、あゆ箱が天に舞い上がっていて、よごべえがみついているくわの木まで、根元からぬけて舞い上がって行きました。

天に着くと、よごべえは、あたりを見まわして、

「こりやこまったなあ。おれ、腹はらへったけれどもちを食う所もない。こまったもんだ」と思いました。

よく見ると、向こうに杉すぎの木のようなものが見えます。だれかいなかと行ってみると、それは、神社じんじやの鳥居とりいでした。鳥居をくぐって入っていくと、りっぱなお堂どうがありました。よごべえは、大きな声で、

「おねがいもうす」といいました。すると、中から、

「おう」と答こたえて、どしんどしんと歩いて出て来たのは、雷かみなりさまでした。よごべえは、雷さまに、

「いやいや。つむじ風がふいて、ここまで舞い上がって来たけれど、腹がへってしかたがない」といいました。雷さまは、

「おれは、食いものといつても何も持っていないが、へそ潰つぶけなら少し残のこつてゐるぞ。食うか」といいました。

「へえ、いただきます」

よごべえがへそ漬けをひとつ食べてみると、とてもおいしいものでした。雷さまは、

「へそ漬けもあんまりなくなつたから、あしたは、へそ抜きに行かねばならんな。おまえ、雨を降らせる手伝いをしろ」といいました。そして、

「おうい、風の神にいなづま。おまえたちも来い。よごべえは、このかめに入っている水をつんつんこぼして、雨を降らせろ」といいました。

つぎの朝、風の神は大きな風ぶくろを持って来たし、いなづまは、火打石をかついでやつてきました。

「さて、始めるぞ」と、雷さまがいました。風の神は、ふくろの口をつんつんと開けてふうつと放しました。すると、下では、村の人たちが、

「なんだか風が出て来てくもってきたぞ。雷が鳴るんじゃないか」といいだしました。いなづまが、火打石を打ってぴかぴかさせると、雷さまが、太鼓を打って、どんどーん。よごべえが、かめの水をつんつんこぼすと、下では、村の人たちが、

「さあ、雨が降ってきたぞ。洗濯物を入れろ」とあわてています。そのとき、よごべえは思わず水をいっぱいこぼしてしまいました。下では、

「こまったこまった。大水になるぞ」とさわいでいます。よごべえが雲のあいだからのぞいてみると、ちょうど自分の村の上でした。そのとたん、よごべえは、雲のあいだからどえーんと落ちてしまいました。

よごべえは、そこにいた人に、

「このあたりに、よごべえという人の家はありませんか」と聞くと、

「ああ、むかし、よごべえという人がいたそうだが、つむじ風にまきあげられてから、帰って来ないよ。どこに行ったもんだか、みな心配したそうだが、いまでは家の者も死に絶えてだれもないよ」といいました。よごべえは、

「それなら、お墓でも行って手を合わさねば」といって、お墓を教えてもらって行きました。すると、草がぼうぼうに生えていたので、よごべえは、泣きながらお墓の草むしりをしました。すると、

「よごべえ、よごべえ。なんだ。おらの髪の毛引っぱたりして」と声がしました。ふと目を覚ますと、よごべえはおかみさんの髪の毛をびりびり引っぱって、泣いていたんだそうです。とーびんと。